

特別講演

日本整形外科の歴史と田代家

蒲原 宏

日本歯科大学医の博物館

○日本近代整形外科の創設と田代義徳

近代日本に西洋の整形外科が紹介・受容されたのは明治時代後期である。

最も早く紹介したのはスクリバの門下生で日本外科学会創立準備委員となった林暉（一八六六—一九四四）である。明治二八（一八九五）年ドイツ・ハイデルベルグの O.Vulpius（一八六七—一九三六）の下に留学し明治三〇（一八九七）年に帰国。東京築地で外科矯正術を標榜して開業した。しかし教育機関として整形外科講座を設けたのは東京大学・京都大学ついで九州大学（当時京都帝国大学福岡医科大学）の三大学だけであった。

東大は明治三九（一九〇六）年四月四日勅令第六八号による。京大は同年四月二三日勅令八九号、九大は明治四一（一九〇八）年五月二四日勅令一四二号により整形外科講座がそれぞれ新設された。

初代教授は東大田代義徳（一八六四—一九三八）、京大は松岡道治（一八六九—一九五三）、九大は住田正雄（一八七八—一九四六）で何れも東大の外科出身であった。

○整形外科の科名決定事情

明治三十九年に東大、京大にほとんど同時に新設講座が設置されるので科名を決定する必要があった。ドイツ語の

Orthopädie あるいは Orthopädische Chirurgie を矯正外科にする案もあったが田代の親友で漢詩人でもあった内科学教授入沢達吉（一八六五—一九三八）、それに医師で漢学者であった永坂石埭（周・一八四五—一九二四）が相談し、『説文解字』の古義により Ortho は「整、斉也。从支、从束正。正亦声」とその注「繫伝」にある「束之、又小擊之、使正。会意」により「矯正」の意味は「整」の一字に包含されており、「整」は「正」に比し働く意味がある。Pädie は「小児」の意味であるが、まぎらわしい。そこでフランスの J.M. Delpech（一七七七—一八三二）が創唱した Orthomorphie の morphie は「形」という字に該当する。Orthopädische Chirurgie を意識して「整形外科」という新科名を提唱し、これが法制上でも正式に決定された。

田代はこの経緯を明治四〇（一九〇七）年一月一日の日本医事週報六一六号に「整形外科ノ説」として公表した。科名決定は田代義徳の第一の業績である。

○三大学の整形外科講座の推移と日本整形外科学会の創立

新講座が設けられたが京大の松岡は大正三（一九一四）年に在任六年余で辞任し、大阪で病院を開業した。九大の住田も在任十三年余の大正一四（一九二五）年辞任し大阪で開業し、何れもその学系を継ぐ後継者が育たぬうちに大を去ってしまった。しかも學術団体としての日本整形外科学会を結成させるべき大切な時期に教育・研究の場から要の二人の俊秀に去られたのである。その後の人事と専門学会の立ち上げるのが田代の大きな仕事となってきた。

田代は大正一三（一九二四）年九月三〇日東大を定年退官し、ドイツ留学から帰国した高木憲次（一八八九—一九六三）が講座を継承した。

九大の後任にイギリスで生理学を研究していた旧門下生の神中正一（一八九〇—一九五三）を急遽帰国させ講座の継承者として推挙し、九大当局を安堵させた。後年の九大整形外科学教室の伝統を守り日本の整形外科を発展させる原動力となった。神中は大正一五（一九二六）年五月に就任した。

京大は外科の尾崎良胤(一八八三—一九一九)が後継者と目されたがインフルエンザで急死。大正八(一九一九)年外科出身の伊藤弘(一八八五—一九八四)がイギリス・スイス・フランスへ留学を命ぜられた。大正九(一九二〇)年帰国、大正一一(一九二二)年二月から整形外科講座を担当し、ようやく三大学の整形外科学講座が安定した状況となった。田代は九大の住田在任中にも自ら訪れて日本整形外科学会創立を説得していた。仲々承諾が得られず学会の結成は遷引していたが、その障壁も無くなった。日本整形外科学会の創立は大正一四(一九二五)年一〇月から創立準備が進められ第七回日本医学会総会に合わせ、大正一五(一九二六)年四月三日東大内科新講堂で創立総会を開催した。創立時の会員数一一八名。日本医学会の第一〇分科会となった。ベルギーについて世界第九番目の日本整形外科学会の創立が田代義徳の第二の業績である。(注)

○整形外科黎明期の人材育成

東大で明治三九年四月四日整形外科講座は公示されたが教授任命は五月九日、診療の開始は一〇月一日入沢内科の一部を割譲され一四床、助手は丸山讓一人という状態であった。一一月に女医北村志津が介補となるという寂しい出発であったが、学会創立時には京大以外に次の六医育機関に整形外科学講座が設立されていた。

講座設立年 主任教授

九大 明治四二年 神中正一

新潟医大 大正六年 本島一郎

慶大 大正一二年 前田友助

慈大 大正一一年 片山国幸

東京女子医専 大正一三年 金子魁一

名古屋医大 昭和二年 名倉重雄

このうち前田友助（近藤外科出身）以外の五人は全て田代の門下生である。その他陸軍軍医部の中枢には保利清・星野健太郎を、日赤病院には陰山栄などの門下生を送り込んでいる。

日本近代整形外科の黎明期をになう人材を次々と育て教育と研究、実務に所を得さしめたのは田代義徳第三の業績である。

○医療の社会化への実践

医療の社会化の関与として三井慈善病院の創立（明治四一（一九〇八）年）と院長の就任。柏倉松蔵の肢体不自由施設「柏学園」（大正二〇（一九二二）年）の創立と支援、骨関節結核サナトリウム「寛徳園」（昭和初期）の設立。肢体不自由児療育の市立光明学校の創立、市立城東病院の設立と院長就任、市立整形外科相談所の設立、市民の軽費診療、救急医療の自動車整備、健康保険制度、医薬分業問題への提言、東京府社会事業協会への関与、下谷医師会長の就任。東京市会議員の就任など社会活動の実践を身を以て示したことは田代義徳の第四の業績である。

○日本整形外科の母と父

教養ある明治人であり、親友の入沢達吉とともに、常に Progressist（進歩主義者）でありつづけようと努力し、Chauvinismus（狂信的愛国主義）、Despotismus（専制主義）、Fascismus（ファシズム）を排斥し Liberalismus（自由主義）、Demokratismus（民主主義）を主張して生涯を貫ぬき通した。（『入沢先生の演説と文章』巻頭言）

この思想の一貫性を基とし、国際感覚と学識に加え偉大な常識を持って門下生を育てた教養ある学者であった。それ故に日本整形外科の生みの母であり育ての父として現代に至っても常に讃仰されているのである。

○田代家への入婿義徳

このような人物を育てた田代家との関係を見ると、義徳は娘婿として田代家に入籍した人である。明治時代における入婿のふんばりと忍従が田舎出身の秀才を模範的な大学人たらしめた家庭環境があったのだろうか。

田代義徳は元治元（一八六四）年七月二六日、栃木県足利市外の旧梁田郡田中村の旧家に生れた。父田部井森平と母きせの三男であった。幼名又助。父も入婿で旧姓塚越氏。又助は一時父の実家塚越家の養子となり塚越又平と称したことがある。

梁田郡八幡村の立教小学校をへて、明治一〇（一八七七）年上京、神田美土代町の汎愛学舎で英語を学ぶ。訓蒙学舎（神田）でドイツ語を学び、ついで独逸語学校（本郷）に入学。明治一二（一八八九）年、東京帝国大学医学部予備門四等乙に入学。

明治一六（一八八三）年二等生の時、田代家の養子となり田代義徳と改姓名した。同時に田代基徳の長女春子（一八七〇年生れ）と結婚した。

義徳一九歳、春子一三歳。五年後の明治二一（一八八八）年九月に長女菊子が生れ、一月に義徳は大学を卒業している。養父の希望もあり直ちに外科の J.K.Scriba（一八四八—一九〇五）の助手となった。

済生学舎の外科学を担当した。

明治二四（一八九一）年四月に田代病院を建て養父の要望に添って大学と掛持で診療をしていたが、二六（一八九三）年四月大学を辞した。「医事新聞」の編集

明治三一（一八九八）年三月二一日（別説には二三日）養父基徳が死亡し、家業・家督を正式に継承した。ドイツ留学はその後二年の明治三三（一九〇〇）年六月九日である。

この以前に明治三〇（一八九七）年には妹の田部井つなと済生学舎での教え子宮田哲雄をめあわせ田代病院の医師として勤務してもらっていた。

留学中の後顧の憂えが無かったのは宮田による。

○田代基徳とその家族

田代基徳は豊前中津藩医松川北渚（良泰・修山）と妻恵美子の子として天保一〇（一八三九）年（月日不詳）に生まれている。（田代基徳年譜）

しかし鈴木要吾の「明治国手百家畧伝（六）」（東京医事新誌二九九六号四五頁・昭和一一）には天保一三（一八四二）年四月一五日となっている。（典故不明）

父北渚は亀井昭陽の高弟で現在の豊前市赤熊に住み、田能村竹田・頼山陽・恒遠醒窓・僧月性等と交遊した高名な文化人であった。墓は中津市自性寺にある。（川寫真人『蘭学の泉ここに湧く』一九九三年・『中津藩蘭学の光芒』二〇〇一年）

基徳は幼名泰二。後年号大楽。隆々亭・柳々亭。

幼時、父北渚に死別し、従兄の中津藩医田代春耕（一徳）の家を継ぎ田代一徳と称した。

安政四（一八五七）年 筑前秋月で江藤養泰に漢学

安政五（一八五八）年 肥後山鹿町武藤璋礼につき賀川流産科・杏蔭斎整骨術・華岡流外科を学ぶ（漢蘭折衷医学）

安政六（一八五九）年 熊本の原因田宗真に素問・靈枢を学ぶ ついで京都に赴く

万延元（一八六〇）年 帰郷

文久元（一八六一）年 四月八日 大坂緒方洪庵の適塾入門

文久二（一八六二）年 洪庵の後を追う江戸へ・西洋医学所に入る

元治元（一八六四）年 句読師

慶応元（一八六五）年 蟠龍艦医官

慶応三 (一八六七) 年 医学所塾監 (頭)

明治元 (一八六八) 年 七月二〇日 医学所 (大病院) 助教試補 『切断要法』出版 私塾修文舎

明治三 (一八七〇) 年 大学中助教

明治四 (一八七一) 年 文部省八等出仕 一〇月五日 陸軍二等軍医正

明治六 (一八七三) 年 『文園雜誌』創刊 『外科手術』出版 基徳と改名 (門人に倉田一徳あるによると)

明治一〇 (一八七七) 年 西南戦役 病体解剖社設立

明治一一 (一八七八) 年 『医事新聞』創刊

明治一七 (一八八四) 年 一等軍医正

明治二四 (一八九一) 年 下谷練塀町に田代病院を開く

明治二五 (一八九二) 年 三月一九日 陸軍軍医監・陸軍軍医学校長

明治二八 (一八九五) 年 日清戦争 三師団軍医部長 留守四師団軍医部長

明治三二 (一八九八) 年 三月二一日没 (六十歳) (田代基徳年譜昭和一六年)

(中外医事新報四三三号明治三二年四月五日には「去月二十三日遂ニ溘焉長逝せられたり享年五十七歳」とある。

鈴木要吾「明治国手百家略伝」にも三月二三日とある)

田代基徳の生年月日と没日が記録によって異なるのは、大正一二年九月一日の関東大震災により田代病院・住宅全焼し基本記録が焼失したことと、昭和一六年の「田代基徳年譜」作製時に誤って記載された可能性があり、今後の研究課題である。

もう一つの原因は江戸時代生れ男基徳の複雑な女性関係があり、入婿義徳が基徳の履歴に深い関心を示さなかった

ために正確に記録されていなかったのではなからうという疑問がある。生年月日と没年月日は今後調査の必要がある。

○基徳の周辺

辻善之助のまとめた「田代基徳年譜」により基徳の周辺を整理すると次のようになる。

正妻 とく（一五歳で嫁す・姓不詳）長女春子（明治三年生） 出産後離婚

権妻 はつ

長男恒徳（九歳死亡）

次男武徳（明治一〇年生）実家松川氏を継ぐ

三男隆徳 夭折

次女とよ 夭折

権妻 きよ——四男泰徳（一八九三—一九二七）

（戸矢氏・春子の継母一四歳で嫁す）

正妻 千代子—三女政子（夭折）

権妻の子もきちんと入籍されている。

基徳は明治二（一八六九）年正妻とくを迎えるが基徳三二歳（天保一〇年生れとして）とく一五歳であった。

明治一二年春子の継母として旧幕臣の娘戸矢千代子を迎えるが、基徳四一歳、千代子一四歳という婚姻であった。

正妻の長女春子に早く養婿を迎え、村上玄水による九州最初の解剖にも参加した中津藩医田代春耕の後を継いだ外科医の後継者として田部井又助（田代義徳）という俊秀を迎え、外科を専攻させた。この事が、計らずも、日本の近

代整形外科の礎をきづくことに繋がったのである。

基徳の織りなした家族構成の複雑な歪みの中で健全な男子が育たなかったことが入婿養子を早々と迎えることになったといえる。

それが日本の近代整形外科の母であり父となる包容力のある、勤勉な、世情の裏にもよく通じた師の上に立つ師と仰がれる人物を生むこととなった。封建社会の末期に学問好きで中津藩医田代家を継ぎ、西洋の近代医学の修得を旨とした田代基徳の娘春子と栃木の農村出身の素朴な一俊秀との出会いがあったということが日本の近代整形外科の歴史のプロローグとして語り伝えられてもよいのではないだろうか。

以上のような視点から調査も得た資料を基に田代家と日本の整形外科の歴史のかかわりあいについて報告する。

(注) 欧米各国の整形外科学会結成年代順位

- 1 一八八七年 アメリカ整形外科学会
- 2 一八九八年 オランダ整形外科学会
- 3 一九〇一年 ドイツ整形外科学会
- 4 一九〇六年 イタリア整形外科・災害外科学会
- 5 一九一八年 イギリス整形外科学会
- 6 一九一八年 フランス整形外科・災害外科学会
- 7 一九一九年 スカンジナビア整形外科学会
- 8 一九二一年 ベルギー整形外科・運動器外科学会
- 9 一九二六年 日本整形外科学会

- 10 一九二八年 ポーランド整形外科学会
(一九二九年国際整形外科・災害外科学会・SICOT 結成)
- 11 一九三〇年 ユーゴスラビア整形外科学会
- 12 一九三五年 ブラジル整形外科学会
- 13 一九三五年 スペイン整形外科学会
- 14 一九三六年 アルゼンチン整形外科学会
- 15 一九三六年 オーストラリア整形外科学会